

トラウマ理解と平和構築

——東アジアにおける歴史的トラウマの克服——

Jeffrey Mensendiek

ジェフリー メンセンディーク

目的

私がトラウマというものに興味を持つようになったきっかけは東日本大震災を経験したことだった。災害によって翻弄される社会や人間関係の中で、私もまた自らの内に深い傷を負った。震災から2年が経過したころ、知人の紹介でアメリカのとあるセミナーに参加した。それは「STAR Program」という、トラウマ理解を基本とする平和構築方法論を学ぶセミナーであった。参加者は世界各地から集まっていた。アフガニスタン人の女性医師、インド人のNGO代表、セルビアの紛争地域で働くドイツ人女性、ブラジルのバプテスト教会牧師、イランの学者、カリフォルニアの貧困地域で青年たちに仕えてきたソーシャルワーカーなど。参加者13名はそれぞれ深刻な状況の中でトラウマ経験者に接し、あるいは自らがトラウマを内在化してきた人たちであった。5日間のセミナーを通して私たちは暴力が生み出す負のスパイラルの仕組みを理解し、そこから新たな平和の道を見出す方法を学んだ。本稿の目的は「スター・モデル」と呼ばれるようになったSTAR プログラムの方法論を紹介することにある。願わくは、東アジアの文脈の中で問題となっている歴史的トラウマと向き合うヒントとしたい。

STARプログラム

2001年にアメリカで起きた同時多発テロ事件直後、3つの教会組織¹のトップ

が連絡を取り合った。彼らはこの出来事を通して更なる暴力が生み出されて行くことを予感し、暴力の連鎖を断ち切る方法論の必要性を感じていた。そこで、バージニア州にある Eastern Mennonite University の Center for Justice and Peacebuilding Studies²を拠点として、手探り状況の中から徐々に生み出されて行ったのがSTAR プログラムである。正式名称 (Strategies for Trauma Awareness and Resilience) の4つの頭文字を取ってSTARと名づけられた。トラウマ理解を糸口として、人間の回復力を高め平和を作り出すツールを学ぶことを目標としたプログラムである。

このプログラムの特徴の一つはその多角的アプローチにある。神経生物学をはじめ、心理学、修復的司法、紛争変革学、人間の安全保障、霊性など、様々な学問的背景を持つ専門家が力を合わせている。現在、STAR プログラムの平和構築モデルは世界的に



注目され、60の国や地域で7000人を超える人がこのモデルを元にトレーニングを行っている。アメリカ国内における例としては、国防総省などがPTSDに苦しむ元兵隊への取り組みとして用いている。また中南米、ソマリア、イラクなどでのワークショップ開催や、各地のリーダーを迎えての指導者養成も行われている。ただ、東アジアにおいてはまだSTARをベースとした取り組みは広がっていないのが現状のようだ。

1 協働した三つの組織はメノナイト教会の世界宣教部門 (Mennonite Central Committee)、米国合同教会 (United Church of Christ)、そしてチャーチ・ワールド・サービス (Church World Service)。

2 東メノナイト大学のサイト：www.emu.edu/cjp/star/

トラウマ理解

東北で被災し、震災直後から被災支援活動に携わっていた私は自分の体と心に異変が生じていることを自覚していた。眠れない、集中できない、周りの景色が目に入らない、予期せぬときに涙が込み上げたり、家族に辛く当たったり、また、攻撃的になったり、考えが激しくマイナスの方に流れてしまう傾向があった。自分に何が起きているか理解できなかった。

STARプログラムはTrauma Awareness（トラウマ認識）から始まる。トラウマという言葉の語源はギリシャ語の負傷（traumat）である。Awarenessという英単語は認識すること、気づくことを意味する。つまり、自らが傷を負ったこと（トラウマ）により自分の体や心に現れる変化について理解し、意識化することからプログラムは始まる。私の参加したセミナーでは、初日のセッションで次の内容に触れた。ストレスとは何か。ストレスとトラウマの違い。個人的トラウマと集団的トラウマの違い。トラウマの種類。トラウマと燃え尽き症候群の関係。トラウマが引き起こす症状。トラウマに対する誤解。戦争や貧困などの状況下で継続されるトラウマによる影響。集団的トラウマの症状など。私たちを取り巻く世界では戦争や内戦を始め、貧困、飢餓、テロ、自然災害、人災、家庭内暴力など、人の体と心を傷つけてしまう要因が増えているようにも思える。自分や自分の身近な者を守る意味でも、トラウマというものを理解する必要がある。神経生物学者のピーター・レビンはその著書³の中で、ストレスとトラウマ的ストレスの違いを区別してこのように述べている。「トラウマ的ストレスとは、人が危機に直面し、対応する能力が圧倒され、対応不能状態に陥ってしまうことである。」まさに、私が震災を通して経験したことを言い当てていた。

今後の議論に関連して、トラウマ理解について紹介された二つの考え方をここで紹介しておきたい。まずは「選ばれたトラウマ」⁴という考え方だ。個人で

3 Levine, Peter *Walking the Tiger*, Berkeley CA. North Atlantic Books, 1997年。

4 「選ばれたトラウマ」はSTARプログラムの参加者マニュアルに説明がある。その他、*Training to Help Traumatized Populations*, US Institute of Peace, Special December 17, 2001年。

あれ、集団であれ、深く傷ついた被害者は、自分が受けたトラウマに執着し取り込むことで、自らのアイデンティティーの一部とすることがある。そうすることによって、一方では癒されないトラウマを利用しつつ、自分を正当化する形で相手を攻撃して自らの欲求を満たそうとする。しかし、もう一方では自らが選んだトラウマが他者の苦しみに共感する心を閉ざしてしまう結果を招く⁵。トラウマを取り込むことは、自らの内に強固なナラティブ（物語）を作り上げることを意味し、結果、他者の物語を完全に排除してしまう。ある集団にとっての栄光や勝利の歴史が、他者の痛みや犠牲の上に成り立っているケースが多い。このことを「選ばれた栄光」と呼ぶ。選ばれたトラウマと選ばれた栄光が全く同じ出来事を指す場合もある。このようにトラウマ経験が人や集団のエゴと密接に絡み合ってしまう仕組みを確認しておく必要がある。

二つ目に紹介したい考え方はPost-Traumatic Growth (PTG)⁶というものである。トラウマ経験者が自らの経験を自分の人間的成長に役立てる可能性のことを言う。この場合、彼らは自らを被害者としてではなく、困難を乗り越えた生存者として位置付ける。PTGを経験した人は、人生の優先順位が変わった、信頼できる人よりも親密な心をつかち合えるようになった、喪失感の中にある人の痛みに関心するようになった、超越した存在とのつながりを深く感じるようになったなど、新しいアイデンティティーに開かれた意識を見出すのである。トラウマ経験をどのように捕らえてゆくのかは人それぞれであるが、ここで挙げた二つの考え方はいずれもトラウマから生まれるエネルギーの方向性を示している。どのような方向性を与えるかはトラウマ経験者自らの決断にかかっているとと言える。

5 “The egoism of victimization”（被害者化によるエゴイズム）という言葉は個人であれ集団であれ、歴史的トラウマによって他者の苦しみに共感できない状態のことを言う。特徴としては、

- ・自らの痛みの向こう側が見えない
- ・復習や仕返しをすることに対して後ろめたさを感じない。例えば、テロにあった人がテロリストになることを可能とするなど。

6 PTGとは、人生における大きな危機的体験や非常につらく大変な出来事を経験するなかで、いろいろ心の闘い・もがきなどをふまえ、むしろ、そのつらい出来事からよい方向、成長を遂げるような方向に変化するといったことを意味する。

トラウマ経験

トラウマは対立を生み、対立は暴力を生み、そして暴力は更なるトラウマを生むのは世の常である。この負のスパイラルが分かっているにもかかわらず、どうして私たちはそのスパイラルから抜け出せないのだろうか？ STARプログラムはその答えとして、人間の自己防衛本能と脳の仕組みに注目している。

動物同様、人間は自己防衛本能で行動する生き物である。たとえば突然トラウマ的出来事に遭遇した場合、三つの反応が考えられる：戦う（fight）、逃げる（flight）、凍る（freeze）。これらは、考えるよりも先に自分を守ろうとする習性から来る。そして、それは人間の脳のしくみと深く関係している。脳は三つの部分から成り立っている。（図2）大脳皮質は平常時に一番影響力を持つ。論理的に判断し、時の流れを把握している。その下にある大脳辺縁系は、感情や記憶をつかさどり、危機的な状況になったときに警鐘を鳴らしてくれる。そして、一番下にあるのが脳幹とよばれる

本能的な脳である。すべてが「今」という時の中で自分を守る役割を持つ。体への変化（緊張や息遣いの変化など）も自動的に脳幹から発信されるシグナルによるものである。さて、危機に直面したときに、私たちの冷静な脳（大脳皮質）は、保留状態におかれ、警鐘を鳴らす脳（大脳辺縁系）と自己防衛の本能（脳幹）が始動する。つまり、危機的な状況にある人が、自らの平常時の価値観や論理的な考え方に反するような行動に出ることがある理由はここにあると言える。



Copyright © 2011 Eastern Mennonite University www.emu.edu/star

(図2)

人間の脳の研究から見てきた事実として大変興味深いものがある。それは、身体的暴力（殴る、蹴るなど）を受けた場合も、精神的暴力（悪口、威圧、罵声、辱めなど）を受けた場合も、脳は同じところで、同じような衝撃として受け止めるというものだ。実際に身体的な暴力を受けていなくても、悪口や辱めによって人はその体の中にトラウマを抱えるとされる。面子を傷つけられる、侮辱される、否定されるという経験が、見えない暴力として人の体や心に影響する。そして人はトラウマを内在化するのである。

では、ストレスやトラウマから生じたエネルギーはどこへ行くのだろうか。動物などはトラウマ的经验の直後に体を激しく震わせたり、鼻をならしたり深く息を吸ったりして負のエネルギーを外に出すことに長けている。しかし、人間は動物と違って、ストレスやトラウマを体に溜め込んで発散しない傾向があるとレヴィンは指摘する⁷。その結果体と心に蓄積されたストレスが次第に私たちの行動を左右するという状況を招いてしまう。

ストレスやトラウマから来る悪いエネルギーを体の外に出すことは重要だ。そのためにどんなことができるのか。まずは、体に注目すること。体操やヨガ、体の緊張をほぐすこと。私の参加したセミナーでは一緒にズンバを踊ったり、finger holds⁸という指を握る行為を通して精神的ストレスを和らげることを経験した。その他、深呼吸すること、笑うこと、運動すること、自然に触れること、楽しむこと、愛する人とつながることなどが例として上げられる。すなわち、精神的快楽や体への集中を通して、体の中に蓄積されたストレスを発散するのだ。

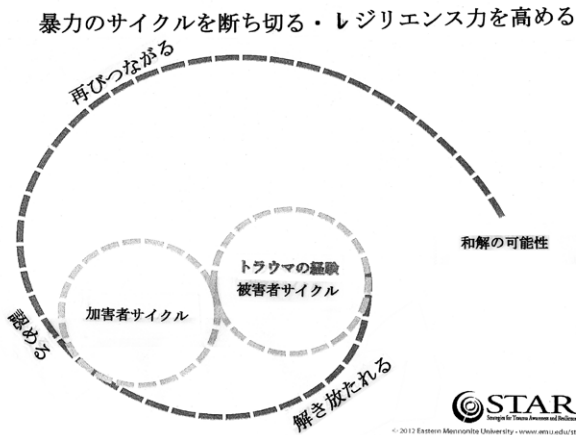
また人間は意味を求める存在でもある。儀式や意味作りを通して、蓄積されたエネルギーを発散し、自らを癒すことができる。私たちはトラウマ的な出来事を経験して、振り返って問う：なぜこのことが起こったのか、と。トラウ

⁷ Levine, Peter and Gabor Mate, *In an Unspoken Voice: How the Body Releases Trauma and Restores Goodness*. Berkeley CA. North Atlantic Books and Lyons, CO; ERGOS Institute Press, 2010年。

⁸ “Finger holds” というのは簡単にできる精神安定の方法である。それぞれの指を抑えることで人間の高まる感情を緩和する効果がある。親指（悲しみ）、人差し指（恐怖やパニック）、中指（怒り）、薬指（心配や不安）、小指（自尊心の欠如）。

マは人生についての価値観や意味を打ち破ることがある。そのときに、自分に起こった悲劇を理解するために儀式や歌、芸術などを通して新しい意味や秩序を作り上げる必要がある。意味の喪失から新しい意味の創造へと進む。例えば、私などは仕事柄、聖書に接することが多いが、聖書学者のデイビット・カーは「聖書はトラウマ体験から生まれた産物だ」⁹と言っている。打ちのめされた経験の中から新しい物語や意味を生み出すことで、人間は回復する力を得るのである。

ここで図3に注目したい。これはSTARプログラムが提唱したカタツムリモデルである。真ん中の二つの丸はトラウマ経験から始まる被害者サイクルと加害者サイクルの負のスパイラルである。(後で詳しく説明する。)そこから飛び出る形でもう一つの円形の線が延びているのが分かる。私たちは本能に従属しているうちは負のスパイラルから抜け出せずに、暴力の連鎖を繰り返してしまう。しかし、時として人はそのスパイラルから飛び出ることがある。私たちはその仕組みを理解し、もっと自覚的に人間の回復力を捉える必要がある。



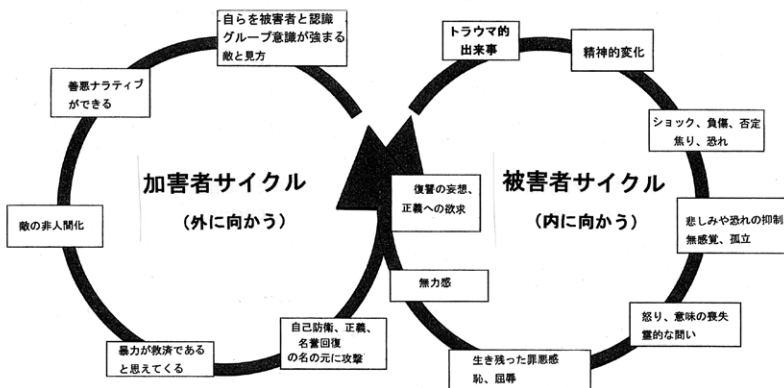
(図3)

9 Carr, David, *Holy Resilience; The Bible's Traumatic Origins*, Yale University Press, 2014年、4頁。

癒されないトラウマと暴力の連鎖

トラウマ体験は私たちの内に負のエネルギーを生み出し、そのエネルギーが発散されずに温存されると、更なる暴力を生み出して行く。リチャード・ロア神父¹⁰の言葉に「変革されない痛みは転移される。」というものがある。癒されないトラウマは暴力として繰り返される。傷を負うことによって生じる暴力は、1) 内に向かってアルコールや麻薬、うつ病という形で自らを苦しめるか、2) 外に向かって怒りや暴言、身体的暴力となって周囲の人に影響を与える。図4は暴力の連鎖の仕組みを体系化した図である。ここには被害者サイクルと加害者サイクルが相互に結び合わされていることが分かる。癒されない暴力は更に家庭や組織、コミュニティーや国家においても繰り返されてゆく。し

暴力のサイクル



(図4)

10 リチャード・ロアはフランシスコ会の司祭。“Center for Action and Contemplation”の代表。(https://cac.org/category/daily-meditations) 神秘主義の立場から祈りと霊性、社会の周縁にいる人々への具体的かわりをとく。“Falling Upward”など、複数の本の著者。ネット上で「黙想の言葉」を定期的に発信していることでも知られている。

かし、被害を受けた者がたとえ相手に復讐をしたとしても、結局のところ満たされることはない。なぜなら、復讐によって今度は自らが加害者となってしまふからだ。このようなときは、冷静な判断をする脳は保留状態におかれているため、自分の行動がかえって、自らが大切にしている価値観をも踏みにじる結果となってしまうことがある。人は復讐や暴力によって一時の快感は得るものの、さらなるトラウマエネルギーが蓄積されて行く結果を招いてしまう。しかし、私たちはこの暴力の連鎖に運命づけられているのだろうか？人間の深い苦しみを変革することはできるのか？スター・モデルは暴力の連鎖を断ち切る人間の力、回復する力に目を注いでいる。トラウマは霊的、精神的、社会的変革 (transformation) の機会としてとらえることができる。

暴力の連鎖を断ち切る

レジリエンス (Resilience) という言葉は最近日本でも耳にするようになっていく。特に震災からの復興という文脈の中で聞かれるようになった。この言葉は「曲がっても折れない」弾力性を意味する。立ち直る力、すぐに元気になる力、回復する力と訳すこともできる。図5のように、外部から圧力がかけられても元に戻る力のことをいう。“Resilience: Why Things Bounce Back” という大変興味深い本がある¹¹。著者たちは自然界を始めとして、人間が作り出す組織体や社会システムにおいて元に戻る力 (レ

Resilience

(レジリエンス)



The ability to bend but not break

曲がるけれど折れない力

(図5)

11 Zolli, Andrew & Ann Marie Healy, *Resilience – Why Things Bounce Back*, Headline Publishing Group, 2012年。

レジリエンス)の比較分析をしている。さんご礁や森林、人間の体などにはレジリエンスが豊かに備わっている。同じように、人間が生み出してきた組織体にも、レジリエンス性の高い組織とそうでない組織がある。何がレジリエンス(困難に持ちこたえて元に戻る力)を促進させ、何が妨げるのか?レジリエンス性が低い例として挙げられているのはリーマンショックを招いた金融システムや、原子力行政である。問題が起きたときに甚大な被害を与え、回復に時間がかかる。逆にレジリエンス性が高い例として挙げられているのは、スマートフォンや携帯電話が活用しているスマートグリッドや、テロ組織アルカイダである。一部分が機能不全に陥っても全体は影響を受けない柔軟性を備え持っている。STARプログラムの二つ目の大きな目的はレジリエンスを高めることにある。その名称にもあるように“Strategies for Resilience”(レジリエンスを高めるための戦略)を提供しているのだ。

被害者サイクルから脱出するためにはまずいくつかの条件が整っていなければならない。身の安全、周りのサポート、リーダーシップ、そして自己決定権である。このいずれもがレジリエンスを高めるための要素だ。例えば2015年12月、カリフォルニア州サンベルナディーノ市で起きた銃乱射事件を例にとってみよう。20数名が一瞬のうちに殺された。主犯者は「イスラム国」との関係を取りざたされていた。この出来事で地域社会は深い不安と恐怖に見舞われた。このような場合、コミュニティの中で冷静に判断して決断するリーダーシップが求められる。行政トップ、宗教者、カウンセラー、大統領などが公な形で方向性を示すことが求められる。私の知っているサンベルナディーノ市のある教会牧師はインターネット上の声明で地域社会に呼びかけた。地域の住民が抱えている恐怖や悲しみを受け止めつつ、同じ地域に住むイスラム教の人々に手を差し伸べる道と呼びかけた。なぜなら、彼らもまた心を痛めて悲しみの中にあつたからである。暴力によって分断され、被害者意識に陥り、攻撃的になる衝動が現実としてある中で、この牧師はもう一つの道を示すことができた。この場合、牧師の選ぶ力と判断力が殺伐とした場の空気をサポートティブなものへと変革したのである。また、他者へ手を差し伸べる行為は地域社会のレジリエンスを高め

ることにつながると言える。

被害者サイクルからの脱出に欠かせない二つ目の要素は「評価すること」。例えば、相手の話に耳を傾けることや公な場で記念することである。しかし、相手のストーリーを認めることは非常に難しい。なぜ私たちは敵対している人に向き合うことに抵抗を感じるのだろうか。それは相手のストーリーに耳を傾けることで自分が圧倒されてしまう恐れがあるからだ。リスクが大きいのだ。自分が作り上げた「真実」が崩れ、真実なるものの複雑さが浮き彫りにされるからである。しかし、相手のストーリーを認めることは、実は自分のバイアスを再認識するばかりではなく、問題の根本原因を理解することにつながる。敵の人間性を回復し、自分の被害者意識を手放すことにもつながってゆく。

ドナ・ヒックスはその著書の中で¹²北アイルランドの紛争で対立関係にあった二人の対談を記録している。一人は20年間服役していたアイルランド解放軍（IRA）の元兵士。対するはその元兵士に撃たれて九死に一生を得たイギリス警官である。二人はその事件から20年後に、BBC（英国放送協会）のテレビ番組“Facing the Truth”で顔を合わせた。そこで二人は信頼の置けるファシリテーター（南アフリカのツツ大司教など）の前で自らのストーリーを語った。元兵士は自分の生い立ちから、閉塞感の中にあった北アイルランドの社会情勢、そして自分がなぜIRAに志願したかなどを話した。イギリスの警官は自分が打たれて倒れるまでの出来事や自分の家族のことを話した。緊張した空気の中で一つの光が差したのはアイルランドの元兵士が語り終わった後だった。彼は自分の隣で友人の女性志願兵を撃ち殺された経験を持っていた。度重なるイギリス政府の一方的な政策によって自決権を奪われたアイルランド人には暴力に訴える手段しか残されていなかった。だから彼はIRAに志願し、彼は「今でもその決断を後悔していない。むしろ誇りに思っている。」と述べたのだった。イギリス警官はその話に耳を傾けつつ言った。「あなたの話を聴いていて思いました。そのような状況で育つことは相当な困難を有したと思う。自分がもし同じような境遇

12 Hicks, Donna, *Dignity: Its Essential Role in Resolving Conflict*, Yale University Press, 2011年、177-196頁

で育っていたら、きっと同じことをしていたと思う。」元兵士はこの言葉を受けて驚いた様子だった。そして、ここで彼の経験や苦痛が認められたことによって二人の関係は大きく動いたとヒックスは振り返っている。耳を傾け、認める行為が被害者サイクルからの開放を促すチャンスとなったのだ。

被害者サイクルからの脱出に欠かせない三つ目の要素は「再びつながること」である。一度壊れてしまった関係を修復し、リスクを覚悟で、対立を乗り越えて変革される可能性を選ぶこと。この覚悟の中には「ゆるす」という選択肢も含まれるが、必ずしも赦しが伴わなければならないわけではない。大事なのは新しい関係へと導かれることだ。上に記した二人の場合は、番組に出る数ヶ月前からそれぞれがファシリテーターやテレビ局の人と丁寧な打ち合わせを重ねていた。番組の意図を理解し、自分が当日どのようなことを言うかまでも準備していた。当日を迎える前にすでに二人は自分がどのような場に入っていくのかを知っていた。ただ、いざ相手と直面すると空気は緊張に変わった。自分に害を与えて人生を狂わせた相手が目の前に座っていたからだ。しかし、お互いのストーリーに耳を傾けるうちに次第と相手の人間性が伝わってきたのだ。

ヒックスはこの対談の中には「魔法の瞬間がある」と言っている。それは人間性と深く結びついている。対立関係によって相手の人間性は見えなくされる。しかし、対談の中でイギリス警官は勇気を出して自分の弱さ (vulnerability)¹³をあらわにした。警官は撃たれた当日のことを振り返ったときに一瞬言葉を失い、涙を流した。隣に座っていた娘はそっと彼の腕に手を置いていた。警官には妻がおり、愛する3人の娘がいた。彼はみんなが見ている前で自分の弱さを見せた。そのとき、彼は自分の心を開いたばかりではなく、その場にいた周りの人の心をも開いた、とヒックスは言う。ヒックスはその著書の中でその瞬間を次のように振り返る。「私がこのプログラムを通して学んだ一番大きなことは、弱さの持つパワーです。魔法が起るのは真実を自分や他者に明かすことを通して、自らが結果的に解放されることです。これは大変逆説的な意味を持ちます。私

13 英語では人間の弱さを表すときに“vulnerability”という表現が使われる。人間のもつ、もろさ、傷つきさまを表している。

たちは本能のせいで自己保存のためには嘘や隠し事が効果的手段だと考えてしまいます。自己保存の本能に支配されているとき、私たちの人生は極限の状態に置かれているかのように思えます。そのようなときに自らを傷つきやすくするのはまるで自殺行為のように思えるのです。¹⁴相手のストーリーに耳を傾けることにはリスクが伴う。しかし、同時に新しい関係性へと向かわせる可能性も含んでいる。もちろん、すべての被害者がこの場合のように心を開くとは限らない。しかし、人間性によってつながりの糸口を見出せた場合には、対立関係が変化し、今までになかった関係へと変容されるのである。上記の警官と元兵士の場合、二人はお互いの家族を連れて集まり、食事を共にし、今でも親しく交流を続けている。ヒックスが紹介している実例のように、対立を乗り越えて再びつながる可能性もあるのだ。この二人の場合、一度も「赦し」という言葉は聞かれなかった。むしろ、二人はお互いの尊厳を尊重し、自らも尊厳を尊重されることを通して、新たな関係性へと踏み出したのである。

歴史的トラウマを乗り越えるために

私の参加したセミナーにフィリス・カービーという白人女性が話しに来てくれた。テーマは歴史的トラウマ。彼女は地元の農家で生まれ育った。白人の家庭に生まれ、白人の学校に通い、普段から白人と黒人が別れて生活していることに何の疑問も持つことなく育った人だった。ある日、フィリスは自分の家にあった古い資料に目を通していった。先祖の財産目録である。そこに、家具や備品と並んで奴隷の数が明記されていた。フィリスは啞然とした。「この奴隷はどうなったのだろうか？ひょっとしてまだ近くに住んでいるのではないか？」フィリスの好奇心はますます高まり、調べて行くうちに、近くの村に自分と同じカービーという名字の黒人家族が住んでいることを突き止めた。フィリスは同じカービーの名を名乗る黒人の家族に手紙を出すことにした。自分を紹介し、会って

14 Hicks, Donna, *Dignity: Its Essential Role in Resolving Conflict*, Yale University Press, 2011年、190頁。

くれないかと頼んだ。会いたい理由も書いた。しかし、返事は来なかった。フィリスはもう一通手紙を出した。するとようやく返事があった。お昼を一緒に食べないかという誘いだった。こうして二人は出会い、自分たちに共通する歴史を確認することとなった。

バージニア州は公民権運動のころ、白人と黒人を同じ学校に通わせることに最後まで抵抗した州だった。米国連邦政府はバージニア州における人権の平等性を確保するために州政府に介入した。フィリスはこの歴史を目の当たりにしていた。自分の通う高校に始めて黒人の生徒が足を踏み入れたときの新聞記事を私たちに見せてくれた。憎しみに満ちた表情をした白人青年たちの間を一人の黒人女性が胸をはって登校している写真だった。フロント・ロイヤル高校の前で写っていた黒人女性の名前はカービーだった。その日、フィリスが対面した黒人女性は、フィリスの先祖が昔所有していた奴隷の子孫であった。

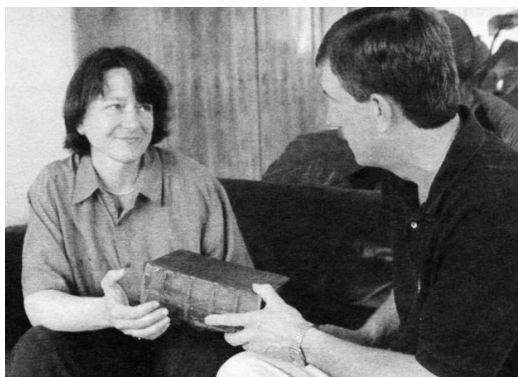
白人と黒人、同じカービーを名乗るこの二人の女性の出会いは思わぬ方向に進むことになる。黒人の女性はフィリスに言った。「私に協力をしてくれないか。フロント・ロイヤル市の中央公園に記念碑を建てたい。人種差別の歴史の中で初めて黒人が白人の学校に通った日のことを後世に残したいのです。」フィリスは快く協力することにした。ただ、二人は市議会の強い抵抗にあうこととなる。フィリスはその記念碑を建てるまでの苦悩を私たちに話してくれた。最後に彼女が私たちに伝えたメッセージは次のものである。「過去は変えることができないが、これからの世界を新しく創って行くことはできる。」二人の友情は人種差別という歴史的トラウマを背負いつつも、新しい関係性、新しいストーリーを生み出すものとなっていたのだ。

アメリカでは2006年から“Coming to the Table”¹⁵という市民運動が始まった。奴隷制度の歴史を直視しつつ、歴史的トラウマを乗り越えて黒人と白人の新し

15 この運動はSTARプログラムを通して出会った白人男性（Tom DeWolf）と黒人女性（Sharon Leslie Morgan）が始めた。二人はアメリカを歩いて渡りながら、人種差別の歴史を直視しながら加害者と被害者の関係を超えて新しいつながりへと導かれた。この運動のことは次のサイトで見ることができる。www.comingtothetable.org

い関係性と癒しを求める運動だ。かつて奴隷制度で財産を得た白人の子孫と、その構造的な暴力によって苦しんできた黒人の末裔とが手を取り合って新しい関係を生み出して10年。そのホームページには次の目標が掲げられている。「カミング・トゥ・ザ・テーブルはアメリカ合衆国の奴隷制度に由来する人種差別からくる傷を癒す志を持つ人をサポートし、リーダーシップを提供します。」

歴史的トラウマは人種差別にかぎらず、過去の迫害や戦争の歴史に結び付けて考えることができる。歴史的トラウマを乗り越えようとする営みの例は、メノナイト教会の中からも生まれている。500年も前のヨーロッパ、宗教改革の嵐が吹き荒れる時代に、再洗礼派として知られていたプロテスタントの宗派はスイスやドイツで激しい迫害にあった。メノナイト派などはその迫害から逃れてアメリカ大陸に渡った。今でもアメリカで、メノナイト教会が運営する歴史博物館を訪れる際には、そのすさまじい迫害の歴史について学ぶことができる。また、メノナイトの人々が大事にしている書物に“The Martyr’s Mirror”（殉教者の鏡）というものがある。ここにも、自分たちの先祖がいかに迫害されてきたかが記録されている。そのトラウマは時代を超えて引き継がれ、メノナイトのアイデンティティーの一部となっているのだ。その状況の限界性を感じたメノナイト自身が、自らスイスに赴き、昔自分たちの先祖を迫害したスイス改革派教会の牧師と会い、和解の儀式を共にしている。そこから新しいつながりと出会いが芽生えている¹⁶。



16 スイス改革派教会のザビーネ・アシュマン牧師が先祖代々大切に持っていた聖書をアメリカのフーバー牧師に手渡している。この聖書は1548年に再洗礼派が訳したもの。宗教改革の時代には異端視され、没収されたり燃やされたりしていた。2003年からアシュマン牧師は自分が所属する宗派が再洗礼派から様々なものを奪ったりしてきたことに気がつき始めた。“Mennonite Family History, April 2007” から。

歴史的トラウマは世代を超えて引き継がれる。加害者と被害者の意識が固定化し、「選ばれたトラウマ」によって自らを正当化しながら相手を批判するナラティブが生まれる。こうして、癒されないトラウマは転移され、暴力として繰り返される。歴史的トラウマを乗り越える営みのためには、公の形でその暴力性を確認し認め、新たなつながりを求めて一緒に歩み出すことが必要である。被害者サイクルが生み出す魔の力を打ち破り、相手との対話の中から見えてくる「真実」を求めて歩みだす。和解と癒しを生み出す道はそこにこそある。

STARプログラムの可能性

本稿ではSTARプログラムの概要を述べてきた。このプログラムは、人類に共通する問題性を取り上げ、それに取り組む方法論を提供している。私自身もそうであったように、個人や集団が無自覚に抱え持つトラウマの闇を打ち破り、平和を生み出す方法論がここにある。願わくば、東アジアの文脈の中でこの方法論から学び、悪化の道をたどる隣国の人々との関係性を変革させてゆくことはできないか。癒されないトラウマがさらなる暴力を生み出すのであれば、これから教材を開発し、またはSTARセミナーを開催して、具体的な和解の営みを小さな形で生み出して行くことはできないか。

STARの産みの親の一人である修復的司法専門家、ハワード・ゼアー氏は「STARは地図ではなく、コンパスだ。」¹⁷と言っている。それぞれの国や地域に適した形があるので、全てを示してくれる地図のようなものではない。ただ、平和、和解、癒しを指し示す方向性には偽りはない。そういう意味でコンパスなのだ。私も東日本大震災の経験を通してこのプログラムによって方向性を示された。まずは私たちの足元から被害者サイクルの暴力性に対する認識を高め、レジリエンスを身に付けるツールとして活用してゆかなければならない。

17 Zehr, Howard, *The Little Book of Restorative Justice*, Intercourse, PA. Good Books, 2002年。

典拠 (Attributes) は以下の通り、許可を得ている。

図2 Brain Model (脳のしくみ) 167頁。

From Elaine Zook Barge, *Village STAR*, originally created in 2007.

図3 Cycles of Violence Model (暴力のサイクル) 169頁。

© Carolyn Yoder and the STAR Team at Eastern Mennonite University. Based in part on the writings of Olga Botcharova, Peter Levine, Walter Wink and Vamik Volkan. For more information about the STAR (Strategies for Trauma Awareness and Resilience) program at Eastern Mennonite University, Harrisonburg, VA, USA, see www.emu.edu/cjp/star

図4 STAR “Snail” Model (カタツムリモデル: Snail Model) 170頁。

© STAR Team at Eastern Mennonite University. Adapted from Olga Botcharova’s model © 1988. Published in *Forgiveness and Reconciliation*, Templeton Foundation Press, 2001. For more information about the STAR (Strategies for Trauma Awareness and Resilience) program at Eastern Mennonite University, Harrisonburg, VA, USA, see www.emu.edu/cjp/star